

令和4年度10月入学・令和5年度4月入学

大学院人間文化総合科学研究科（博士前期課程）入学試験問題

【一 般 選 抜】

言語文化学専攻
日本アジア言語文化学コース

〔専門科目〕

試験日：令和4年9月1日（木）

注 意

1. この冊子には、次のとおり、2分野、合計5題の問題が綴じられている。
(総ページ数 — 8ページ)

A群 (A I～AIV)

B

試験開始に際しては、まず、上記のとおり全問題があることを確認し、脱落がある場合は、挙手により監督官に申し出ること。

2. 各受験者は、A群のうちからいずれか1題を選び、Bの問題と合わせて解答すること。
3. 解答に際しては、A・Bそれぞれ指定された解答用紙を用いること。
(裏面も使用してよい。)

なお、使用する解答用紙のすべてに受験番号及び氏名を記入すること。

4. 試験終了後、この冊子は持ち帰ること。

A-1 つぎに掲げるのは、『校本萬葉集』の巻八・一四四九番歌部分である。これを読んで、後の問に答えよ。

| | |
|---|--|
| <p>類聚古集 類神 天細温西 無陸京</p> <p>○類前行ニ大伴田村大壞与妹坂 上天壤アリ。朱ニテ天ヲ消セリ。 ソノ右ニ朱大アリ。 和歌童蒙抄第七チハナヌクア サチカハラノツホスミレイマ サカリナリワカコフラクハ 万葉第八ニアリ。</p> | <p>ハナヌクアサチカハラノツホスミレ 茅花拔淺茅之原乃都保須美禮今盛有吾戀 昔波</p> <p>〔本文〕三茅類、茅神、茅。三淺神、淺、ユノ下ニ拔アリ。但、拔ヲ消セリ。 〔訓〕三茅類、茅神、茅、西、茶、細、温、天、無、茅。 〔訓〕ツハナヌク、神、チハナヌク、京、茅ノ左ニ諸、チアリ、諸ニテ右 ノ訓ト入レ換フ可キヲ示セリ。五イマサカリアリ。類、いまこ かりナリ。神、西、細、温、天、京、附、イマサカリナリ。 〔諸説〕○ツハナヌク、古、チバナヌク。○イマサカリアリ、代精 イマサカリナリ。</p> |
|---|--|

問一 第四句「今盛有」の訓について、付訓状況を整理して示し、どの訓が妥当と考えられるか、理由とともに述べよ。

問二 『類聚古集』の本文と訓を再現せよ。

問三 結句「わが恋ふらくは」の「恋ふらく」の語法について、詳しく説明せよ。

問四 この歌は『家持集』に次のように載る。これを現代語訳せよ。

a つばなぬくあさぢがはらのつばすみれいまさかりにもしげきわがこひ

問五 この歌は『古今和歌六帖』（永青文庫本）につきのように載る。これを翻字せよ。

b


問六 『萬葉集』一四四九番歌と、右のa歌及びb歌との関係はどのようなものだと考えられるか、詳しく説明せよ。

問七 『萬葉集』巻八について、知るところを述べよ。

A II つぎの文章について、後の問に答えよ。

見るからに 1 つらき哉かゝらさりせはかゝらましやは【a】
なけきこしみちの露にもまさりけりなれにしさとをこふるなみたは【b】

この哥は懷円と赤染とか王昭君をよめる哥なりもろこしに御門の人の娘をめしつゝ御らむしてみやのうちにすゑなめて四五百人とゑなめていたつらにあれとのちくにはあまりおほくつもりにければ御らむすることもなくてさふらふなるをゑひすのやうなるものゝ宮こにまいりたりけるにいかにかすへきと人くくに仰られければこの宮のうちにいたつらにおほく侍人のいとしもなからむをひとりたふへきなりそれしまさる心さしはあらしと申ければさもおほしめして身つから御覽してその人をとさためさせたまふへけれども人くのおほさにおほしめしわつらひて絵師をめしてこの人くのかたちゑにかきうつしてまいれとおほせられければ次第にかきければこの人くゝゑひすの具にならむ事をなけき思ひてわれもくゝとこかねをとらせそれならぬものをもとらせければいとしもなきかたちをもよくかきなしてもてまいりけるに

王昭君をよめる
たのむそ 繪師はよき心さしはあらしと申ければ
さもおほしめして身つから御覽してその人をとさためさせたまふへけれども人くのおほさにおほしめしわつらひて絵師をめしてこの人くのかたちゑにかきうつしてまいれとおほせられければ次第にかきければこの人くゝゑひすの具にならむ事をなけき思ひてわれもくゝとこかねをとらせそれならぬものをもとらせければいとしもなきかたちをもよくかきなしてもてまいりけるに

そのことになりてめして御らむしけるにまことにたまひかりてえもいはさりければこれをゑひすにたはむみかとおほしめしわつらひてなけかせたまひけれとゑひすその人をなんたたまはるへきときゝてまいりにければあらためさためらるゝ事もなくてなくゝたひてつかはしければむまにのせてはるかにゐていにけり王昭君なきかなしふ事かきりなし

御門もこひしきにおほしめしわつらひてかの王昭君のゐたりけるところを御らむしければ春はやなき風になひき驚つれくになき秋はこの庭につもりきのしのふひまもなくともあはれなることかきりなしこれをきゝて哥によめるなりかゝらさりせはかゝらましやとよめるはわろからましはたのまさらましとよめるなりふるさとをこふるなみたはみちの露にもまさるとよめるも王昭君か思らむ心のうちをおしはかりてよむなりこのゑひすのやうなるものと申すは胡の国の御門のわか国にはよき女のなきにかたちよからむ人たまはらむと申たりけるとも申たる文ありとかや

(静嘉堂文庫蔵『無名抄 俊頼』により、適宜他本により校訂した)

問一 本文中の空欄1は、底本では左のように記されている。これについて説明せよ。

もみろるる

問二 傍線部2について、「さ」が指す内容を明らかにして、解釈せよ。

問三 傍線部3「われもくゝとこかねをとらせ」とは誰が何のためにどうしたのか、具体的に説明せよ。

問四 本文中の影印部分について、

(1) 翻字せよ。改行および漢字と仮名の区別はもとのままとすること。

(2) 翻字した本文を、人物関係を明らかにして的確に現代語訳せよ。

問五 傍線部4について、「ものあはれなる」に託されている人物の心情を指摘しつつ、解釈せよ。

問六 和歌aについて、本文中の波線部Xをふまえて、一首の解釈を詳しく述べよ。

問七 和歌bについて、本文中の波線部Yをふまえて、一首の解釈を詳しく述べよ。

問八 和歌a・bは、『後拾遺和歌集』(巻第十七 雑三)に「王昭君をよめる」の詞書で所収する歌である。『後拾遺和歌集』の下命者について知るところを詳しく述べよ。

A III つぎの文を読んで後の問に答えよ。

(問貫一は、鳴沢隆三の家に十年來寄寓し、隆三の美貌の娘・宮を深く愛し、婿入りして夫婦となる日を心待ちにしている。宮は、近ごろふさいだ様子で、貫一は医者にかからせるなど大変心配するが、その貫一に何も言わずに、突然母親とともに熱海に湯治へでかけてしまった。)

※ なお、印刷不鮮明な箇所は適宜補った。

(六)の二

翌日果して熱海より便はありけれど、僅に一枚の端書をもて途中の無事と宿を通知せるに過ぎざりき。宛名は隆三と貫一とを並べて、宮の手蹟なり。貫一は讀了ると齊しく片々に引裂きて捨てけり。宮の在らば如何にと言解くなるべし。彼の親しく言解かば如何に打腹立ちたりとも貫一の心の釋けざることはあらじ。宮の前には常に彼は慍をも、恨をも、憂をも忘るゝなり。今は可懐しき顔を見る能はざる失望に加ふるに、此不平に遭ひて、而も言解く者のあらざれば、彼の慍は野火の飽くこと知らず燦々やうなり。

八十三

此夕隆三は彼に食後の茶を薦めぬ。一人の佗しければ留めて物語はんとてなるべし。然れども貫一の屈託顔して絶えず思の非ぬ方に馳する氣色なるを、

「お前如何ぞ爲なすたか。うむ、元氣が無いの。」
「はあ、少し胸が痛みますので。」
「それは好くない。劇く痛みでもするかな。」
「いや、何爲、もう宜しいのでございます。」
「うれちゃ茶は可くまい。」
「頂戴します。」
「怒る淺ましき儘を人に移さんは、甚だ謂無き事なり、と自ら制して、書齋に歸りて愁ひ心を傷めんより、人に對して

八十四

姑く憂を忘るゝに如かじと思ひければ、彼は努めて寛がんとしたれども、動もすれば心は空になりて、主の語を聞逸さむとす。

今日文の來て細々と優しき事など書聯ねたらば、如何に我は嬉しからん。なか／＼同じ處に居て飽かず顔を見るに易へて、其の樂は深かるべきを。さては出行きし恨も忘れられて、二夜三夜は遠かりて、せめて其の文を形見に思續けんもをかしかるべきを。

彼は其身の卒に出行きしを、如何に本意無く我の思ふらんかは能く知るべきに。其を知らば一筆書きて、など我を慰めんとは爲ざる。其の一筆を如何に我の嬉しく思ふらん

八十五

から兩肌を脱いで世話をしなければならぬ。お前の體た、なう。」

八十八

之を聞ける貫一は鐵繩をもて縛られたるやうに、身の重きに堪へず、心の轉た苦しきを感じたり。其思の餘りに大いなるが爲に、彼は其中に在りて其中に在ることを忘れんと爲る平生を省みたるなり。

「はい、非常な御恩に預りまして考へて見ますと、口では御禮の申しやうもございませぬ。愚父が何程の事を致したか知りませんが、なか／＼這麼御恩返を受けるほどの事が出来るものでは有りませぬ。愚父の事は措きまして、私は私で、此御恩は如何か立派に御返し申したいと念つ

て居ります。愚父の亡りました彼時に、此方で引取つて戴かなかつたら、私は今頃何に成つて居りますか、其を思ひますと、世間に私は幸なものは恐く無いでございませう。」

彼は十五の少年の驚くまでに大人びたる己を見て、其の着たる衣を見て、其の坐れる褥を見て、旋て美しき宮と共に此家の主となるべき其身を思ひて、漫に涙を催せり。實に七千圓の粧金を隨へて、百萬金も購ふ可からざる戀女房を得べき學士よ、彼は小買の米を風呂敷に提げて、其の影の如く瘦せたる大と與に月夜を走りし少年なるをや。

問一

「お前が然り思うてくれれば私も張合がある。就ては改

八十九

めてお前に頼があるのだが、聞いてくれるか。」

九十

「如何いふ事ですか、私で出来ませぬ事ならば、何なりと致します。」

彼は慍々深く答ふるに憚らざりけれど、心の底には危む所無きにしめあらざりき。人の慍る言を出す時は、多く能はざる事を強ふる例なればなり。

「外でも無いが、宮の事だ、宮を嫁に遣らうかと思つて。」見るに堪へざる貫一の驚愕をば、せめて亂さんと彼は慌忙しく語を次ぎぬ。

「之に就いては私も種々と考へたけれど、大きに思ふ所もあるで、いつう彼は遣つて了うての、お前は最少の事だから大學を卒業して、四五年も歐羅巴へ留學して、全然仕上げた所で身を固めるとしたら如何かな。」

汝の命を興へよと逼らるゝ事あらば、其時の人の思は如何なるべき！可恐しきまでに色を失へる貫一は空く隆三の面を打目成るのみ。彼は太く困じたる體にて、長き髻をば採みに採みたり。

「お前に約束をして置いて、今更變換を爲るのは、何とも氣の毒だが、之に就いては私も大きに考へた所があるので、必ずお前の爲にも悪いやうには計はんから、可いかい、宮は嫁に遣る事にしてくれ、なう。」

九十一

んかをも能く知るべきに。我を可憐と思へる人の何故に然は爲ざるにやあらん。恚までに情篤からぬ戀の世に在るべきか疑ふべし疑ふべしと貫一の胸は又亂れぬ。主の聲に驚かされて、彼は忽ち其事を忘るべき舌に復れり。

「ちと話したい事があるのだが、や、誠に妙な話で、なう。」笑ふにもあらず、響むにもあらず、稍自ら嘲むに似たる隆三の顔は燈火に照されて、常には見ざる異しき相を顯せるやうに貫一は覺ゆるなりき。

「はあ、如何いふ御話ですか。」
彼は長き髻を忙しく採みては、又頃の邊より徐に撫下して、先打出さん語を案じたり。

八十六

「お前の一身上の事に就いてだかの。」
總に慍く言ひしのみにて、彼は又遲ひぬ、其の髻は虹に苦しむ馬の尾のやうに揮はれつゝ。

「いよ／＼お前も今年の卒業だつたの。」
貫一は遠に敬はるゝ心地して自と膝を正せり。

「で、私もまあ一安心したと云ふもので、幾分か是でお前の御父様に對して恩返も出来たやうな譯、就いてはお前の益勉強してくれんでは困るなう。未だ此先大學を卒業して、うれから社會へ出て相應の地位を得る迄に仕上げなければ、私も鼻は高くないのだ。如何か洋行の一つも爲せて、指折の人物に爲たいと考へて居るくらゐ、未だ／＼是

八十七

「なう、悪く取つてくれては困るよ、彼を嫁に遣るからうれで我家とお前との縁を切つて了ふと云ふのではない、可いかい。大した事は無いが此家は全然お前に譲るのだ、お前は矢張私の家督よ、なう。で、洋行も爲せやうと思ふのだ。必ず悪く取つては困るよ。」

九十二

約束をした宮を、餘所へ遣ると云へば、何かお前に不足でもあるやうに聞けるけれど、決して然しした譯ではないのだから、其處はお前が能く承知してくれなければ困る、誤解されては困る。又お前にしては學問を仕上げて、なう、天暗の人物に成るのが第一の希望であらう。其志を遂げさへ爲れば、宮と一所になる、ならんは何程の事でもない

のだ。なう、然うだらう、然し是は理窟で、お前も不服かも知れん。不服と思ふから私も頼むのだ。お前に頼が有ると言うたのは此の事だ。

従來もお前を世話した、後來も益世話せうからなう、其處に免じて、お前も此頼は聞いてくれ。」
貫一は戦々唇を咬緊めつゝ、故ら緩唇に出せる聲音は、怪しくも常に變れり。

「うれちや翁様の御都合で、如何しても宮さんは私に下さる譯には參らんのですか。」
「さあ斷つて遣れんと云ふ次第ではないが、お前の意は如何だ。私の頼は聽かずとも、又自分の修行の邪魔にならう

九十三

ども、那樣貪着は無しに、何でも彼でも宮が欲しいと云ふのかな。」

九十四

「然うではあるまい。」
「得言はぬ貫一が胸には、理に似たる彼の理不盡を憤りて、責むべき事、詰るべき事、罵るべき言、破るべき事、辱むべき事の數々は沸くが如く充滿したれど、彼は神にも勝れる恩人なり。是非を問はず其言には逆ふべからずと思へば、血出づるまで舌を咬みても、敢て言はじと覺悟せるなり。彼は又思へり、恩人は恩を枷に如此く逼れども、我は此枷

の爲に屈せらるべきも、彼は如何なる斧を以てか宮の愛を割かんとすらん。宮が情は我が思ふまゝに濃ならずとも、我を棄つるが如き然ばかり薄き情にはあらざるを。彼だに我を棄てざらんには、枷も理不盡も恐るべきかは。頼むべきは宮が心なり。頼まるるも宮が心也と、彼は可憐き宮を思ひて、其父に對する愠を和げんと勉めたり。我は常に宮が情の濃ならざるを疑へり。恰も好し此理不盡が彼が愛の力を試むるに足るなる。善し、盤根錯節に遇はずんば。
「嫁に遣ると有仰るのは、何方へ御遣しになるのですか。」
「それは未だ確とは極らんが、下谷に富山銀行と云ふの

九十五

るよ、なう。私だとして年効も無く事を好んで、何爲に若いものゝ不爲になれと思ふものかな。お前も能く其處を考へて見てくれ。
私も恚して頼むからは、お前の方の頼も聴かう。今年卒業したら直に洋行でもしたいと思ふなら、又然云ふ事に私も一番奮發しやうではないか。明日にも宮と一處になつて、私たちを安心させてくれるよりは、お前も私も最少の所を辛抱して、いつかの事博士になつて喜ばして欲しいか。」
彼は然も思ひのまゝに説き終つたる面色して、寛に髻を撫で居たり。

百

貫一は彼の説進むに従ひて、漸く其心事の火を觀るより明なるを得たり。彼が千言萬語の舌を弄して倦まざるは畢竟利の一字を掩はんが爲のみ。貧する者の盜むは世の習ながら、貧せざるも仍盜まんとする乎。我も穢れたる此世に生れたれば、穢れたりとは自ら知らず、或は穢れたる念を起し、或は穢れたる行を爲すことあらむ。然れど自ら穢れたり知りて自ら穢すべきや。妻を賣りて博士を買ふ！是豈穢れたるの最も大なる者ならずや。
世は穢れ、人は穢れたれども、我は常に我恩人の獨り汚に染みざるを信じて疑はざりき。過れば夢より淡き小恩をも忘れずして、貧しき孤子を養へる志は、之を證して餘

百一

がある、それ富山重平な、彼の息子の嫁に欲しいと云ふ話があるのだ。」

九十六

其ぞ其輪の骨牌會に三百圓の金剛石を炫かせし男にあらすや、と貫一は陰に嘲笑へり。然れど又餘りに其人の意外なるに駭きて、旋て又彼は自ら笑ひぬ。是必ずしも意外ならず、苟も吾が宮の如く美しきき、目あり心あるものゝ誰かは戀ひざらん。獨り怪しむべきは隆三の意なる哉。我十年の約は輕々しく破るべきにあらす、猶謂無きは、一人娘を出して嫁せしめんとするなり。戯るゝにはあらすや、心狂へるにはあらすや。貫一は寧ろ恚く疑ふをば、事の彼の眞意に出でしを疑はんより遙かるべしと信じたりき。

問四

問五

彼は競争者の金剛石なるを聞き、一度は汚され辱められたらんやうにも怒を作せしかど、既に勝負は分明にして我は手を束ねて此弱敵の自ら僣るゝを看んと思へば、心稍番居ぬ。
「は、は、富山重平、聞いて居ります、偉い財産家で。」
此一言に隆三の面は熱くなりぬ。
之に就いては私も大きに考へたのだ。何に爲ろ、お前との約束もあるものなり、又一人娘の事でもあり、然し、お前の後來に就いても、宮の一身に就いてもの、又私たちは段々取る年であつて見れば、其老後だの、其等の事を考へて見ると、此鳴澤の家には、お前も知つての通り、恚と云ふ親類

九十七

あるを、人の淺ましきか、私の愚なるか、恩人は酷くも我を欺きぬ。今は世を擧げて皆穢れたるよ。悲めばとて既に穢れたる世を奈何にせん。我は此時此穢れたる世を喜ばん乎。然し此穢れたる世に唯一つ穢れざるものあり、喜ぶべきものあるにあらすや。
貫一は可憐き宮が事を思へるなり。
我の愛か、死をもて脅すとも得て屈すべからず。宮が愛か、其の帝の冠を飾れると聞く世界無雙の大金剛石をもて購はんとすとも、争でか動し得べき。我と彼の愛のこゝろ淤泥の中に輝く玉の如きものなれ。我は此一つの穢れざるを抱きて、此世の渾て穢れたるを忘れん。

百二

問六

貫一は恚く自ら慰めて、有樂に彼の巧言を憎し可恨しと思ひつゝも、狂げて然らぬ體に聽き居たるなりけり。うれで、此話には宮さんも知つて居るのですか。
「薄々は知つて居る。」
「では未だ宮さんの意見は御聞にならんので？」
「うれば、何だ、一寸聞いたがの。」
「宮さんは如何申して居りましたか。」
「宮か、宮は別に如何といふ事は無いのだ。御父様や御母様の宜しいやうにと云ふので、宮の方には異存は無いのだ。彼にも悉皆譯を説いて聞かした所が、然云ふ次第ならはと、漸く得心がいつたのだ。」

百三

も無いで、何かに就けて誠に心細いわ、なう。私たちは追々年を取るばかり、お前九らは若しと云ふもので、爰に可頼しい親類が有れば何程心丈夫だか知れて、なう。因で富山ならば親類に持つても、可憐からん家格だ。氣の毒な思をしてお前との約束を變易するもの、私たちが一人娘を他へ遣つて了ふのも、究竟は銘々の爲に行末好かれと思より外は無いのだ。

九十八

それに、富山からは切つての懇望で、無理に一人娘を賣ふと云ふ事であれば、子息夫婦は鳴澤の子同様に、富山も鳴澤も一家のつもりで、決して鳴澤家を疎には爲まい。娘が内に居なくなつて不都合があるならば、何の様に其不

問七

問八

都合の無いやうには計はうからと、なう、うれば随分事を分けた話で。
決して慾ではないが、良い親類を持つと云ふものは、人て謂へば取も直さず良い友達で、お前にしても然うだらう、良い友達があれば、萬事の話合手になる、何彼の力になる、なう、謂はゞ親類は一家の友達だ。
お前は是から世の中に出るにしても、大相な便宜になるといふもの。其や此や考へて見ると、内に置かうよりは遣つた方が、誰の爲彼の爲ではない、四方八方が好いのだから、私も決心して、いつか遣らうと思ふのだ。
私の了簡は恚云ふのだから、必ず悪く取つてくれては困

九十九

断じて詐なるべしと思ひながら、貫一の胸は跳りぬ。
「は、宮さんは承知を爲しましたので？」
「然う、異存は無いのだ。で、お前も承知してくれ、なう。一寸聞けば無理のやうではあるが、其實少しも無理ではないのだ。私の今話した譯はお前にも能く解つたらうが、なう。」
「其譯が解つたら、お前も快く承知してくれ、なう。貫一。」
「は、は。」
「うれではお前も承知をしてくれるな。うれで私も大きに

百四

安心した。悉しい事は何れ又寛緩話を爲やう。而してお前の頼も聴かうから、まあ能く種々考へて置くが可い。」
「は、は。」

百五

- 問一 傍線部1について、貫一はなぜこのようなことをしたのか、説明せよ。
- 問二 傍線部2「彼は小買の米を風呂敷に提げて」とはどういう状況を述べたものか、説明せよ。
- 問三 傍線部3「理に似たる彼の理不盡」とはどういうことか、説明せよ。
- 問四 傍線部4「弱敵」とあるが、「弱敵」と呼ぶ、貫一の心持ちを説明せよ。
- 問五 傍線部5「此一言に隆三の面は熱くなりぬ」とあるが、その理由を説明せよ。
- 問六 傍線部ア、イ、ウと「はい。」が三回繰り返されているが、この繰り返しからどのようなことが読み取れるか、詳しく説明せよ。
- 問七 問題文の作品名と作者を答えよ。

□ つぎの文を読み、後の問に答えよ。

開元中、頒賜邊軍續衣、製於宮中。有兵士於短袍中得詩曰：「沙場征戍客，寒苦若爲眠。戰袍經手作，知落阿誰邊？蓄意多添線，含情更著綿。今生已過也，重結後身緣。」兵士以詩白於帥，帥進之。玄宗命以詩遍示六官，曰：「有作者勿隱，吾不罪汝。」有一宮人自言萬死。玄宗深憫之，遂以嫁得詩人。仍謂之曰：「我與汝結今身緣。」邊人皆感泣。

〔本事詩〕より

注 ○邊軍：守邊之軍。 ○續衣：充以棉絮之衣。 ○宮人：宮女。宮中供役使的女子。

(1) 傍線部①を書き下せ。

(2) 傍線部②について、「自言萬死」とはどういうことか、説明せよ。

(3) 傍線部③を現代語訳せよ。

(4) 波線部Aについて、

(a) 尾聯「今生已過也，重結後身緣」の平仄を示せ。平声は○、仄声は●を用いること。

(b) この詩を解釈せよ。

□ つぎの文を読み、後の問に答えよ。

受程度副詞修飾は汉语形容词惟一有形的特征，用它划定形容词的范围行不行呢？显然，一大批能受程度副詞修飾的成分被分析为动词或动词性短语，于是有人补充了一条：后面还不能带宾语。这样虽排除了各种短语形式，但依此划出的“形容词”范畴，除了能受程度副詞修飾和后面不能带宾语这规定性的两条以外，还有什么共同特征呢？比如说，我们看看这类“形容词”都能充当什么句法成分，答案则有主语、定语、谓语、宾语、状语、补语等几乎所有句子成分，这样宽泛的功能当然是难以令人接受的。事实上，若像这样把两条标准随意放在一起划出一个词类，则汉语里哪个下位的小类（如动词的次类）都有理由成为独立的词类了。如果我们全面地罗列出程度副詞所能修飾的成分，可以看出那并不是一个词类的范围，而是一种谓语成分的范围。

重要的是，我们划出的类别必须是综合反映了意义、功能和形式的结果，虽然不能要求三者完全对应，但必须使三者之间有某种可解释的内在联系。上述标准看不出这种联系。

就汉语的具体情况而言，没有可靠的形态标志，程度副詞又不能作为形式标准，就只有概念意义跟句法功能两项了。凭意义划分词类被认为是不可靠的，正如吕叔湘先生所说：“传统语法在一定程度上利用意义，可是对于如何利用，又如何控制，没有很好的论述，这是它在理论方面的弱点。”

（《汉语功能与语法研究》より）

- (1) 二か所の下線部 a に引用符が付されている意図を、本文の内容に即して日本語で説明せよ。
- (2) 下線部 b を日本語に訳せ。
- (3) 下線部 c について、どういうことか、日本語で具体的に説明せよ。

B つぎの事項のうち、いずれか任意の五つを選んで説明せよ。なお、それぞれの解答のはじめに、何番の事項についての解答であるかをかならず明記すること。

- ① 国見歌
- ② 『三玉絵』
- ③ 頓阿
- ④ 『閑吟集』
- ⑤ 「或る女」
- ⑥ 遠藤周作
- ⑦ 焦点化
- ⑧ 第四次『新思潮』
- ⑨ 節用集
- ⑩ 漢文訓読語
- ⑪ 助動詞の相互承接
- ⑫ 絶対敬語と相対敬語
- ⑬ 『切韻』系韻書
- ⑭ 山水詩
- ⑮ 韓愈
- ⑯ 三言二拍
- ⑰ 雑誌『今天』
- ⑱ 韓寒

令和4年度10月入学・令和5年度4月入学

大学院人間文化総合科学研究科（博士前期課程）入学試験問題

【外国人留学生特別選抜】

言語文化学専攻
日本アジア言語文化学コース

〔専門科目〕

試験日：令和4年9月1日（木）

注 意

1. この冊子には、次のとおり、3分野、合計6題の問題が綴じられている。
(総ページ数 — 8ページ)

A群 (A I ~ A IV)

B

C

試験開始に際しては、まず、上記のとおり全問題があることを確認し、脱落がある場合は、挙手により監督官に申し出ること。

2. 各受験者は、A群のうちからいずれか1題を選び、BおよびCの問題と合わせて解答すること。
 3. 解答に際しては、A・B・Cそれぞれ指定された解答用紙を用いること。
(裏面も使用してよい。)
- なお、使用する解答用紙のすべてに受験番号及び氏名を記入すること。
4. 試験終了後、この冊子は持ち帰ること。

A-1 つぎに掲げるのは、『校本萬葉集』の巻八・一四四九番歌部分である。これを読んで、後の問に答えよ。

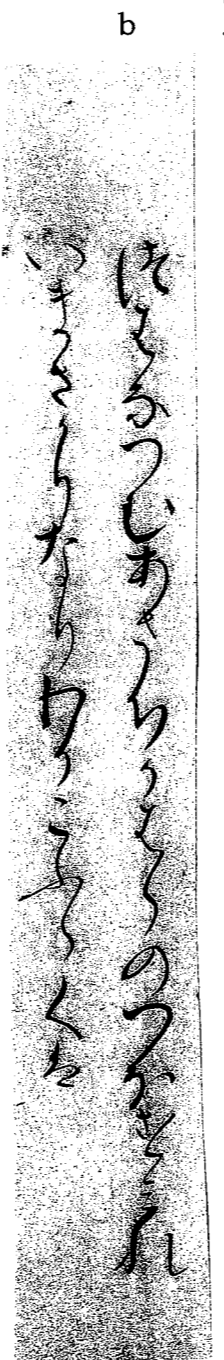
| | |
|---|---|
| <p>○類前行ニ犬伴田村大嬢と妹媛 上天嬢アリ朱ニテ天ヲ消セリ ソノ右ニ朱大アリ 和歌童蒙抄第七チハナヌクア サチカハラノツホスミレイマ サカリナリワカコフラクハ 万葉第八ニアリ</p> | <p>○本ハナヌクアサチカハラノツホスミレ 茅花拔淺茅之原乃都保須美禮今盛有吾戀 昔波</p> <p>〔本文〕三茅類茅神茅 三淺神殘ユノ下ニ拔アリ但拔ヲ消セリ 三茅類茅神茅西茅細温矢無茅 〔訓〕ツハナヌク神チハナヌク京茅ノ左ニ諸チアリ諸ニテ右 ノ訓ト入レ換フ可キヲ示セリ 吾イマサカリアリ類いまさ かりナリ神西細温矢京附イマサカリナリ 〔諸説〕○ツハナヌク古チバナヌク ○イマサカリアリ代精 イマサカリナリ</p> |
|---|---|

問一 第四句「今盛有」の訓について、付訓状況を整理して示し、どの訓が妥当と考えられるか、理由とともに述べよ。

問二 『類聚古集』の本文と訓を再現せよ。

問三 結句「わが恋ふらくは」の「恋ふらく」の語法について、詳しく説明せよ。

問四 この歌は『家持集』に次のように載る。これを現代語訳せよ。
a つばなぬくあさぢがはらのつばすみれいまさかりにもしげきわがこひ



問六 『萬葉集』一四四九番歌と、右のa歌及びb歌との関係はどのようなものだと考えられるか、詳しく説明せよ。

問七 『萬葉集』巻八について、知るところを述べよ。

見るからに 1 つらき哉かゝらさりせはかゝらましやは【a】
なけきこしみちの露にもまさりけりなれにしさとをこふるなみたは【b】

この哥は懷円と赤染とか王昭君をよめる哥なりもろこしに御門の人の娘をめしつゝ御らむしてみやのうちにすゑなめて四五百人とゑなめていたつらにあれどのちくにはあまりおほくつもりにければ御らむすることもなくてさふらなるをゑひすのやうなるものゝ宮こにまいりたりけるにいかにかすへきと人くくに仰られければこの宮のうちにいたつらにおほく侍人のいとしもなからむをひとりたふへきなりそれしまさる心さしはあらしと申ければさもおほしめして身つから御覽してその人をときためさせたまふへけれども人くのおほさにおほしめしわつらひて絵師をめしてこの人くのかたちゑにかきうつしてまいれとおほせられければ次第にかきければこの人くゑひすの具にならむ事をなけき思ひてわれもくとかかねをとらせそれならぬものをもとらせければいとしもなきかたちをもよくかきなしてもてまいりけるに

王昭君いふくふららむをたてしつゝなみたは
たのむそ侍師よよまふらむらりはむそをたてし
いふくふららむをたてしつゝなみたは
いふくふららむをたてしつゝなみたは

そのことになりてめして御らむしけるにまことにたまひかりてえもいはさりければこれをゑひすにたはむみかとおほしめしわつらひてなけかせたまひけれとゑひすその人をなんたまはるへきときゝてまいりにければあらためさせためらるゝ事もなくてなくくたひてつかはしければむまにのせてはるかにゐていにけり王昭君なきかなしふ事かきりなし

御門もこひしきにおほしめしわつらひてかの王昭君のゐたりけるところを御らむしければ春はやなき風になひき驚つれくになき秋はこのは庭につもりきのしのふひまもなくものあはれなることかきりなしこれをきゝて哥によめるなりかゝらさりせはかゝらましやとよめるはわろからましはたのまさらましとよめるなりゝふるさとをこふるなみたはみちの露にもまさるとよめるも王昭君か思らむ心のうちをおしはかりてよむなりこのゑひすのやうなるものと申すは胡の国の御門のわか国にはよき女のなきにかたちよからむ人たまはらむと申たりけるとも申たる文ありとかや

(静嘉堂文庫蔵『無名抄 俊頼』により、適宜他本により校訂した)

問一 本文中の空欄1は、底本では左のように記されている。これについて説明せよ。

もふらむを

問二 傍線部2について、「さ」が指す内容を明らかにして、解釈せよ。

問三 傍線部3「われもく」とかねをとらせ」とは誰が何のためにどうしたのか、具体的に説明せよ。

問四 本文中の影印部分について、

(1) 翻字せよ。改行および漢字と仮名の区別はもとのままとすること。

(2) 翻字した本文を、人物関係を明らかにして的確に現代語訳せよ。

問五 傍線部4について、「ものあはれなる」に託されている人物の心情を指摘しつつ、解釈せよ。

問六 和歌aについて、本文中の波線部Xをふまえて、一首の解釈を詳しく述べよ。

問七 和歌bについて、本文中の波線部Yをふまえて、一首の解釈を詳しく述べよ。

問八 和歌a・bは、『後拾遺和歌集』(巻第十七 雑三)に「王昭君をよめる」の詞書で所収する歌である。『後拾遺和歌集』の下命者について知るところを詳しく述べよ。

A III つぎの文を読んで後の問に答えよ。

(問一) 貫一は、鳴沢隆三の家に十年來寄寓し、隆三の美貌の娘・宮を深く愛し、婿入りして夫婦となる日を心待ちにしている。宮は、近ごろふさいだ様子で、貫一は医者にかからせるなど大変心配するが、その貫一に何も言わずに、突然母親とともに熱海に湯治へでかけてしまった。)

※ なお、印刷不鮮明な箇所は適宜補った。

(六)の二

翌日果して熱海より便はありけれど、僅に一枚の端書をもて途中の無事と宿を通知せらるるに過ぎざりき。宛名は隆三と貫一とを並べて、宮の手跡なり。貫一は讀ると齊しく片々に引裂きて捨てしけり。宮の在らば如何にと言解くなるべし。彼の親しく言解かば如何に打腹立ちたりとも貫一の心の釋けざることはあらむ。宮の前には常に彼は慍をも、恨をも、憂をも忘るゝなり。今は可憐しき顔を見る能はざる失望に加ふるに、此不平に遭ひて、而も言解く者のあらざれば、彼の慍は野火の飽くこと知らず燎くやうなり。

八十三

から兩肌を脱いで世話をしなければならぬお前の體だ。なう。」

八十八

之を聞ける貫一は鐵細をもて縛られたるやうに、身の重きに堪へず、心の轉た苦しきを感じたり。其思の餘りに大いなるが爲に、彼は其中に在りて其中に在ることを忘れんと爲る平生を省みたるなり。

「はい、非常な御恩に預りまして考へて見ますと、口では御禮の申しやうでございます。愚父が何程の事を致したか知りませんが、なか／＼這慶御恩返を受けるほどの事が出来るものでは有りません。愚父の事は措置しまして、私は私で、此御恩は如何か立派に御返し申したいと念つ

て居ります。愚父の亡りました彼時に、此方で引取つて戴かなかつたら、私は今頃何に成つて居りますか、其を思ひますと、世間に私は幸なものは恐く無いでございます。

彼は十五の少年の驚くまでに大人びたる己を見て、其の着たる衣を見て、其の坐れる褥を見て、施て美しき宮と共に此家の主にならざるべき身と思ひて、漫に涙を催せり。貫一に七千圓の粧金を隨つて、百萬金も購ふ可からざる戀女房を得べき學士よ、彼は小買の米を風呂敷に提げて、其の影の如く瘦せたる犬と與に月夜を走りし少年なるをや。

問一

「お前が然う思うてくれれば私も張合がある。就いては改

八十九

此夕隆三は彼に食後の茶を薦めぬ。一人の佻しければ留めて物語はほどでなるべし。然れども貫一の屈託願して絶えず思の非ぬ方に馳する氣色なるを、

八十四

「お前如何ぞ爲なすたか。うむ、元氣が無いの。」
「はあ、少し胸が痛みますので。」
「それは好くない。劇く痛みでもするかな。」
「いや、何爲、もう宜しいのでござります。」
「うれちゃ茶は可くまい。」
「頂戴します。」
「怒る淺ましき慍を人に移さんば、甚だ謂無き事なり、と自ら制して、書齋に歸りて愁ひ心を傷めんより、人に對して

姑く憂を忘るゝに如かごと思ひければ、彼は努めて寛がんとしたれども、動もすれば心は空になりて、主の語を聞遊むとす。

今日文の來て細々と優しき事など書聯ねたらば、如何に我は嬉しからん。なか／＼同じ處に居て飽かず顔を見るに易へて、其の樂は深かるべきを、さては出行きし恨も忘られて、二夜三夜は遠かりて、せめて其の文を形見に思續けんもをかしかるべき。

彼は其身の卒に出行きしを、如何に本意無く我の思ふらんかは能く知るべきに、其を知らば一筆書きて、など我を慰めんとは爲ざる。其の一筆を如何に我の嬉しく思ふらん

八十五

めてお前に頼があるのだが、聞いてくれるか。」

九十

「如何いふ事ですか、私で出来ませう事ならば、何なりと致します。」
彼は慍く慍く答ふるに憚らざりけれど、心の底には危む所無きにしもあらざりき。人の慍る言を出す時は、多く能はざる事を強ふる例なればなり。

「外でも無いが、宮の事だ、宮を嫁に遣らうかと思つて。」
見るに堪へざる貫一の驚愕をば、せめて亂さんと彼は慌忙しく語を次ぎぬ。

「之に就いては私も種々と考へたけれど、大きに思ふ所もあるで、いつう彼は遣つて了うて、お前は最少しの事だ

から大學を卒業して、四五年も歐羅巴へ留學して、全然仕上げた所で身を固めるとしたら如何かな。」

汝の命を與へよと逼らるゝ事あらば、其時の人の思は如何なるべき！可恐しきまでに色を失へる貫一は空く隆三の面を打目成るのみ。彼は太く困じたる體にて、長き髯をば探みに探みたり。

「お前に約束をして置いて、今更變換を爲るのは、何とも氣の毒だが、之に就いては私も大きに考へた所があるので、必ずお前の爲にも悪いやうには計はんから、可いから、宮は嫁に遣る事にしてくれ、なう。」

九十一

んかをも能く知るべきに。我を可憐と思へる人の何故に然は爲ざるにやあらん。恚までに情篤からぬ戀の世に在るべきか疑ふべし疑ふべしと貫一の胸は又亂れぬ。主の聲に驚かされて、彼は忽ち其事を忘るべき舌に復れり。

八十六

「ちと話したい事があるのだが、や、誠に妙な話で、なう。」
笑ふにもあらず、擧むにもあらず、稍自ら嘲むに似たる隆三の顔は燈火に照されて、常には見ざる異しき相を顯せるやうに、貫一は覺ゆるなりき。

「はあ、如何いふ御話ですか。」
彼は長き髯を忙しく探みては、又頃の邊より徐に撫下して、先打出さん語を案じたり。

「お前の一身上の事に就いてだかの。」
繼に慍く言ひしのみにて、彼は又遲ひぬ、其の髯は此に苦しむ馬の尾のやうに揮はれつゝ。

八十七

「いよ／＼お前も今年の卒業だつたの。」
貫一は遽に敬はるゝ心地して自と膝を正せり。

「で、私もまあ一安心したと云ふもので、幾分か是てお前の御父様に對して恩返も出来たやうな譯、就いてはお前も益勉強してくれんでは困るなう。未だ此先大學を卒業して、うれから社會へ出て相應の地位を得る迄に仕上げなければ、私も鼻は高くないのだ。如何か洋行の一つも爲せて、指折の人物に爲たいと考へて居るくらゐ、未だ／＼是

「なう、悪く取つてくれては困るよ、彼を嫁に遣るからうれで我家とお前との縁を切つて了ふと云ふのではな、可いかい。大した事は無いが此家は全然お前に譲るのだ、お前は矢張私の家督よ、なうで、洋行も爲せやうと思ふのだ。必ず悪く取つては困るよ。

九十二

約束をした宮をの、餘所へ遣ると云へば、何かお前に不足であるやうに聞けるけれど、決して然した譯ではないのだから、其處はお前が能く承知してくれなければ困る、誤解されては困る。又お前にしては學問を仕上げ、なう、天晴の人物に成るのが第一の希望であらう。其志を遂げさへ爲れば、宮と一所になる、ならんは何程の事でもない

のだ。なう、然うたらう、然し是は理窟で、お前も不服かも知れん。不服と思ふから私も頼むのだ。お前に頼が有ると言うたのは此の事だ。

從來もお前を世話した、後來も益世話せうからなう、其處に免じて、お前も此頼は聽いてくれ。」
貫一は戦く唇を咬緊めつゝ、故ら緩辭に出せる聲音は、怪しくも常に變れり。

九十三

- 問一 傍線部1について、貫一はなぜこのようなことをしたのか、説明せよ。
- 問二 傍線部2「彼は小買の米を風呂敷に提げて」とはどういう状況を述べたものか、説明せよ。
- 問三 傍線部3「理に似たる彼の理不盡」とはどういうことか、説明せよ。
- 問四 傍線部4「弱敵」とあるが、「弱敵」と呼ぶ、貫一の心持ちを説明せよ。
- 問五 傍線部5「此一言に隆三の面は熱くなりぬ」とあるが、その理由を説明せよ。
- 問六 傍線部ア、イ、ウと「はい。」が三回繰り返されているが、この繰り返しからどのようなことが読み取れるか、詳しく説明せよ。
- 問七 問題文の作品名と作者を答えよ。

日 つぎの文を読み、後の問に答えよ。

開元中、頒賜邊軍續衣、製於宮中。有兵士於短袍中得詩曰：「沙場征戍客，寒苦若爲眠。戰袍經
 手作，知落阿誰邊？蓄意多添線，含情更著綿。今生已過也，重結後身緣。」兵士以詩白於帥，
 帥進之。①玄宗命以詩遍示六官，曰：「有作者勿隱，吾不罪汝。」②有一官人自言萬死。③玄宗深憫
 之，遂以嫁得詩人。仍謂之曰：「我與汝結今身緣。」邊人皆感泣。

注 ○邊軍：守邊之軍。 ○續衣：充以棉絮之衣。 ○官人：宮女。宮中供役使的女子。

『本事詩』より

- (1) 傍線部①を書き下せ。
- (2) 傍線部②について、「自言萬死」とはどういうことか、説明せよ。
- (3) 傍線部③を現代語訳せよ。
- (4) 波線部Aについて、
 - (a) 尾聯「今生已過也，重結後身緣」の平仄を示せ。平声は○、仄声は●を用いること。
 - (b) この詩を解釈せよ。

日 つぎの文を読み、後の問に答えよ。

受程度副詞修飾は汉语形容詞惟一有形的特征，用它划定形容詞的范围行不行呢？显然，一大批能受程度副詞修飾的成分被分析为动词或动词性短语，于是有人补充了一条：后面还不能带宾语。这样虽排除了各种短语形式，但依此划出的“形容詞”范畴，除了能受程度副詞修飾和后面不能带宾语这规定性的两条以外，还有什么共同特征呢？比如说，我们看看这类“形容詞”都能充当什么句法成分，答案则有主语、定语、谓语、宾语、状语、补语等几乎所有句子成分，这样宽泛的功能当然是难以令人接受的。事实上，若像这样把两条标准随意放在一起划出一个词类，则汉语里哪个下位的小类（如动词的次类）都有理由成为独立的词类了。如果我们全面地列出程度副詞所能修飾的成分，可以看出那并不是一个词类的范围，而是一种谓語成分的范围。

重要的是，我们划出的类别必须是综合反映了意义、功能和形式的结果，虽然不能要求三者完全对应，但必须使三者之间有某种可解释的内在联系。上述标准看不出这种联系。

就汉语的具体情况而言，没有可靠的形态标志，程度副詞又不能作为形式标准，就只有概念意义跟句法功能两项了。凭意义划分词类被认为是不可靠的，正如吕叔湘先生所说：“传统语法在一定程度上利用意义，可是对于如何利用，又如何控制，没有很好的论述，这是它在理论方面的弱点。”

（《汉语功能与语法研究》より）

- (1) 二か所の下線部 a に引用符が付されている意図を、本文の内容に即して日本語で説明せよ。
- (2) 下線部 b を日本語に訳せ。
- (3) 下線部 c について、どういうことか、日本語で具体的に説明せよ。

B つぎの事項のうち、いずれか任意の三つを選んで説明せよ。なお、それぞれの解答のはじめに、何番の事項についての解答であるかをかならず明記すること。

- ① 国見歌
- ② 『三宝絵』
- ③ 頓阿
- ④ 『閑吟集』
- ⑤ 「或る女」
- ⑥ 遠藤周作
- ⑦ 焦点化
- ⑧ 第四次『新思潮』
- ⑨ 節用集
- ⑩ 漢文訓読語
- ⑪ 助動詞の相互承接
- ⑫ 絶対敬語と相対敬語
- ⑬ 『切韻』系韻書
- ⑭ 山水詩
- ⑮ 韓愈
- ⑯ 三言二拍
- ⑰ 雑誌『今天』
- ⑱ 韓寒

C あなたの研究しようとしているテーマは何か、またそれに対してどのようなアプローチを試みるつもりかを、具体的に論述せよ。